

Blackberry Winter における 三要素の相互作用

高 橋 順 子

人には自分が幼かった頃のことを回想する時期と、子供の頃を回想するとき、必ずまず悩裏に浮んでくるある場面がある。

Blackberry Winter の作者 Robert Penn Warren によれば、この作品は自伝ではなく、多くの fiction により成立しているというが、^{(1), (2)} とにかく、この作品の場合は、その時期とは、彼自身の *Recollection* によれば、それは1945年秋から冬にかけてのことであり、それはちょうど第二次世界大戦が終り、世の中はこれからもう以前のようにではないということが国全体の雰囲気として漂っていた時であった。また、この終戦は米国にとって勝利であったにもかかわらず、単にある国を相手として戦い単純勝利を得たというような古典戦ではなく、いろいろな国が敵味方に入り組んで互いに連合を組織して戦った世界戦争であった。米国は第一次大戦に続いてまたも祖先の国であるヨーロッパの戦争に巻き込まれ、結果として、連合側に味方しても枢軸側を祖先の国とする米国人にとっては辛い戦争体験であった。それ故どちら側が勝利しても米国人にとっては“slimed foundations”,⁽³⁾ 何かドロドロしたものをひきずったままの勝利感であった。戦争が終ったという安堵感、開放感の底には、かなり複雑な感情が含まれていたと思われる。しかし、とにかく、おそらく史上最大の戦争は終結したのである。もうこれ以上新しい戦死報告は来ないだろうし、食糧の統制管理も解かれるだろうし、これ以上武器弾薬を製造することはなくなるだろうし（少くとも当分の間は）、戦争続行によって煽られていた興奮度もしだいに落ちついてゆくだろう。そして世の中には再び平穏な日々が戻っ

てくる、したいことができる自由な生活を再び獲得できた喜びは、この作家にふと子供の頃のことを思い出させる心の余裕を与えたのではないだろうか。

それと、もうひとつこの心の余裕に関する理由は、作者によれば、大作を二つ書き終えたことによるものであった。ひとつは1943年から携わってきた長編小説 *All the King's Men* であり、もうひとつは Coleridge の *The Ancient Mariner* の評論であった。前者は Pulitzer Prize (1946年) をとり、後者はたいへんな労作で学識豊かな評論であり、当代における鑑賞の古典であるとして高く評価されている。⁽⁴⁾

Robert Penn Warren によると、この二作とも彼自身の個人的思考は大いに盛りこんだとしても、この仕事の内容自体は impersonal であり、詩人である彼が創作の陶醉にひたるだけの世界ではなかった。そして当時彼は故郷から遠く離れた、5月でもまだ雪の降る北方の都市 Minneapolis の狭いアパートに住み、⁽⁵⁾ 40才の誕生日を迎えたばかりの頃で、この impersonal な大仕事を終えてほっと息をつきたい気持ちの中には、人生のひとつの転換期にさしかかった男が、しばらく現実の様々な束縛から逃げ出して昔の小さな思い出を探し回ろうとして、または何か新しい出発をするきっかけとして nostalgia に自分を浸し、自分の人生が始まった頃の思い出の世界へ戻ってみようと試みたのであろう。

その時彼は、数年前に Tennessee の sharecropper の物語を書いたことを思い出した。それは彼によれば失敗作で、出版されたこともなかった。それでその物語をもう一度手直ししてみようと思って書いたものが *The Patented Gate and the Mean Hamburger* と *Blackberry Winter* であった。この二作のあと、彼は次々と故郷を舞台とした短編を書き、1948年に *The Circus in the Attic* という題の短編集として出版した。Blackberry Winter もこの短編集の中に含まれているが、この作品は1946年に単独で出版され、高い評価を得ている。^{(6), (7), (8)}

このように高い評価を得たにもかかわらず、*The Circus in the Attic* は彼の唯一の短編集であり、この本が出版された時には彼はすでに次の大作 *World Enough and Time* にとりくんでいた。彼は *Blackberry Winter: Recollection* の中で、impersonal な仕事のあとに、何か nostalgia にかられてこの作品を書いたとしているが、おそらくこれは彼にとって息ぬきの時であり、彼は作家としての自分の本質はむしろ impersonal な仕事（小説、評論を含む）において十分発揮されることを認識していたようである。彼は二度とこの種の作品（短編で自伝的要素の強いもの）を書いていない。

次に、回想するとき必ず、まず悩裏に浮んでくるある場面があると前述したが、それはその回想者を過去へ導く糸となるもので、この作品では主人公（narrator）が9才の時の6月のある朝、急に寒さが戻ってきた blackberry winter⁽⁹⁾ の日のことであった。その朝、居間の暖炉にはまだ小さな火が入っていて心地よく、家の中は平和な雰囲気包まれていた。しかし、主人公の少年 Seth は barefoot で外へ行こうとして母親に分かり、押し問題をしている。仕方なく靴とくつ下を一応、居間にまで持ってきてあるが Seth はどうしても barefoot で行きたくてぐずっている。一言いい返しては母の反応をうかがう。そして母に見つからぬよう、なぜ最初から裏口ではなく、表のドアから出て行かなかったかとしきりに悔やんでいる。

当時はそのことしか頭にはなく、真剣な思いであったはずであるが、大人になって振り返ればすべて甘く懐かしい思い出となってくる。回想の中では、時は固定して変化してゆくことはない。過去において起ったことはすでに消されることのない事実となるので、記憶の中でその事実は不変なものとなる。その解釈がたとえ後になって、度々、様々な理由で（成長過程における理解度の変化、又は未知の新事実の出現による）変わることが

あっても、その過去における時は永遠に不変である。回想の中に未来はないからである。故に過去における時は、すでに固定された概念の中にのみ存在する。

これまでが、主人公を過去の世界へ連れ戻す糸となる部分である。次に tramp が登場し、物語が発展してゆく。

Tramp:

母とのやりとりの最中、ふと窓から見知らぬ男がこちらへやってくるのに気がつく。Tramp の出現である。Warren は *Recollection* の中で、この tramp は fiction で、こんな男が自分の両親の農場へやってきたことはなかったが、物語に tension を盛り上げるために創作したと書いている。⁽¹⁰⁾

その tramp がいかに mysterious であったかはまず、その物語への登場の仕方にある。彼は何の前触れもなく突然現れる。また、彼がやってきた方向は、ふだん見知らぬ者（土地の人ではない者）がやってくるルートではなかった。その方角から推測するに、その男は川の方から登ってきたらしい。その川へは森や沼地を通って行かねばならず、そこへ魚や蛙をとりに行ったり、*hunting* に行く人は必ず、少年の家に寄って許可をとってから行くし、見知らぬ者がそのまま通ったら犬たちが黙ってはいなかったはずで、従ってこの男は前日か早朝に川の方へ行って帰ってきたのではなく、最初から川の方からやってきたことになる。しかし、前夜は大嵐で、洪水になっていたし、そんな所でその男が何をしていたのか疑問がわく。隣の農場から来たとしても、ここへの道は今では誰も使っていない道なので、藪や林をかき分けて来なければならず、たいへんな道程である。あの嵐の夜を彼はどこで過したのか、そして本当にどこからこの家へやってきたのか。まさに mysterious な entering である。

男が近づいて来ると、さらに不可解なことに、彼の服装は農作業をする

人のものではない。Blue jeans や overalls の代りに上着を着て、シャツを着て、tie もポケットに入れていて、先の鋭った靴をはき、straw hat の代りにフェルトの帽子をかぶっている。Tennessee の真中で、都会から遠く離れたこんな田舎で、この服装は全く合わない。手も日にやけておらず、屋外で働く男の手ではない。洗面台で手を洗う時、あたかもこれから教会かパーティへ行くかのように（実際には、農場へ仕事を求めてやってきたのだから、彼はこれから農作業の手伝いをするはずなのに）、鏡の前でいろいろ自分の顔を写してみる。それに、この家に近づいてきた時、コリー犬とブルドックに吠えつかれ、この男がポケットからナイフを出したのを少年は見た。こんな大型の獰猛な犬どもを相手にナイフで応戦しようとするのは考えが足りない、自分がナイフをふるう前に犬に飛びかかられてしまうだろう、と少年は思う。この男は農場に飼われている犬がどんなものか全然分っていない。

このように一見 city tramp に見えるが、この男には礼儀が全くない。少年の母親と話をする時帽子をとらないし、家に入る時、ドアをノックもしない。きちんと掃除された brick walk に平気でつばを吐くし、少年の父からたった数時間の労賃として50セントももらった時、礼をいうどころか悪態をつく。“Poult” が何であるか知らないし、drawn chicken を片付けるように言われてもどうしたらいいか分らない。彼は農作業について何の知識も持ち合せていない。まことに矛盾だらけで不可解な男である。

この物語にはこの tramp を含めて三つの劇的主柱となる要素がある。あとの二つは、季節の急変を表わす blackberry winter と少年の barefoot である。Blackberry winter はこの物語の背景基盤となるもので、少年の barefoot への願望と tramp の出現がそれぞれ blackberry winter と関わり合いながら物語の tension を保ち、意味内容を深めてゆ

く。

また、この三つの要素には、期待と不安と好奇心という theme がそれぞれに含められている。期待には必ず不安と好奇心がある ratio を保ちつつ存在するものである。Blackberry winter においては、(嵐による被害の) 不安の ratio が最も高く、それに嵐のあと何が起きたか見に行こうという好奇心が続く。Barefoot においては期待が最も大きい share をしめる (barefoot で外へ、自然の中へ出てゆくことへの期待感)。そして tramp においては好奇心が最も強調される。ナイフを持った stranger ということに不安も感じられるが、それよりも田舎に育った少年には、このような突然の見なれぬ訪問者がとてつもなく珍らしく、恐さも忘れて好奇心の虜となるのである。

寒の戻りの、嵐を呼ぶ blackberry winter, そして、そんな日であるから barefoot で出かけることが問題となる、そこへ突然出現する tramp, この三つの素材が、それぞれに期待と不安と好奇心を織りまぜて、相互に作用しながら物語を運んでゆく。従ってこの三要素の相互作用は、二重の構造となっている。

Barefoot :

夏になるのを待ちかねていた主人公の少年 Seth は、靴もくつ下もなしの barefoot で出かけたくて仕方がない。時は6月。学校は終り、休みに入っている。学校から開放され、自分は今、自由であり、大人の指図に従いたくない、という主張と、さらに自然に直に接したいという願望故に、彼は barefoot で出かけることに固執する。彼にとって barefoot で行くことは、一種の “declaration of independence” であった。⁽¹⁰⁾ しかし、この independence はまた、様々な現実と直面することでもあった。Tramp の出現を機に、反対していた母の目をごまかして、本当に barefoot で外へ出てみるが、creek へ行って洪水の様子を見物して戻ってく

ると、もう足先が冷たくて凍えそうになる。

“... every step I took was like ice.” (p. 631)

より自由を求めて、自分の判断でしたことであるが、実際には現実はいどく厳しかった。命令を押しつけられることを嫌って自由を選択すれば、それなりの代償を払わなければならないこともある。それでも Seth はまっすぐ家へ戻らず、父の雇い人の Dellie の家に行く。彼には三つの期待があった。そこなら暖炉には火があって足を暖められるし、Dellie は彼の母親のように靴やくつ下をはけとは言わないし、彼女の息子の Little Jebb と遊べる。そう思って走ってゆくと、ふだんは家の周りをきちんと保っているはずの Dellie の cabin の庭は、家の下から前夜の嵐で流れ出した汚物で埋まっている。いつも自慢にするほどきれいにしていた彼女の家なのに、その家の下にはこれほどたくさんのゴミがあったことになる。少年はその事実を知って愕然となる。

“It was worse, because it was a surprise. I had never thought of all that filth being under Dellie’s house.” (p. 632)

これでは、他の、いつも不評を被っている cabin の雇い人たちと同じではないか。それが最初の失望で、次は彼が Dellie の cabin に入ってから起る。Dellie は病気で寝ていて、いつも元気よく働いている Dellie のようではない。訪ねてきた少年に何もしてくれないし、全く話し相手にもなってくれない。それで彼は今度は息子の Little Jebb と遊びはじめるのだが、遊びに夢中になって大きな声で騒ぎ回り、Dellie は怒りを爆発させる。しかし彼女は、この騒ぎのもとである Seth に対してではなく、自分の息子にそれをぶつけ、Little Jebb をひどく平手打ちにする。

“It was an awful slap, more awful for the kind of weakness which it came from and brought of focus.” (p. 633)

Little Jebb は声も出さずにあえぎながら涙を流す。彼には何故自分がぶたれなければならなかったのかよく分っていたはずである。これは無念

の涙である。Seth はこの場にいたたまれなくなって Dellie の家を飛び出す。ここで少年はまた新しい、世の中の厳しい条理を体験する。自分が起した迷惑のために Little Jebb がひどく叱られ、何故自分が叱られなかったのかを Seth は目のあたりで思い知らされる。Little Jebb がぶたれた時の苦痛は Seth が心理的に share したものであり、彼の涙はさらにそれを深めるものであったにちがいない。

Dellie の家に行けば、暖かい火が暖炉にはあるし、靴をはけ、くつ下をはけと文句は言われぬし、Little Jebb は彼の言うとおりに遊んでくれるし、そこは Seth にとって小さな楽園であったはずなのに、そこがいつも自分の期待を満たしてくれる場所ではないことを、彼自身に直接ではなく、他の者が身代りになるという事実をもって、彼はしっかりと体験させられたのである。結局彼は Dellie の家で、ゆっくりと暖をとることもできなかったし、Little Jebb と十分に遊ぶこともできなかった。彼の甘い期待はすっかり当てがはずれてしまう。

Dellie の家をほとんど飛び出すようにして出た彼は、今度は Dellie の夫である Old Jebb の仕事場へ行くが、ここでも Jebb の話がよく分らず、つまらなくなり、仕方なく家へ戻ってくると、家の前で例の tramp と父が話しているのを見る。父は tramp に新しい働き手を雇うことはできないからと言って、この朝の労賃として一日分の労賃を与えるが、tramp は父の足元に唾を吐き、悪態をつく。そして去ってゆく tramp を少年は追いかける。彼はまだこのえたいの知れない visitor（実際には何もできない、野卑で粗野な流れ者にすぎないのであるが）に大いに関心がある。少年が必死に追ってくるのに気がついて、tramp はただ a meaningless look を向けるだけで、何も言わずどんどん先へ行く。

“... he never noticed me.” (p. 637)

門の所まで来た時、少年は、「どこから来たの？」ときくと、tramp は、「余計なお世話だ。」という。少年は再び、「どこへ行くの？」ときく。す

ると tramp は足を止め、少年に近付いてきて、「俺についてくるのをやめないと、お前の喉を掻っ切るぞ。」と凄んで去ってゆく。

少年がこの突然の珍しい visitor に抱いた期待と好奇心は、ここではっきりとピリオドを打たれる。しかし、ピリオドを打ったのは（または打とうとしたのは）この tramp であって、実際には Seth の心の中でこの好奇心は決して消滅することなく、それからずっと、おそらく生きている限り、彼はこの好奇心をひきずり続けてゆくのである。

“But, I did follow him, all the years.” (p. 638)

この tramp はどの場面でも善人にはならなかったし、話にのってきてはくれなかった。決して少年の方に好意的に向いてきてはくれなかった。そしておそらく、その後の少年の人生においても同じような体験はくり返されたはずである。この、うまくゆかない部分を慰め、力づけてくれる存在であったのが両親であり、Dellie 一家であった。ずっとのちになってその存在が失われた時、殊更にあの tramp との出会いがより鮮明に記憶の中に甦ってくる。何故ならば、この tramp との出会いは、この少年に人生の（大人になってゆく過程の）最初の扉を開かせることになったからであった。その時彼は、自分が育ってきた世界以外の世界にふれ、しかもそれは決して快い味ではなかった。この出来事は、故に、少年 Seth にとっては忘れ得ぬ思い出であり、従って、（期待は外れるが）消滅はしないのである。

Blackberry Winter :

Blackberry winter は夏 (season of joy) が来ようとする季節に突然やってくる unexpected cold で、これは冬 (season of death) のゆうつさに人々を引きずり戻す気候である。寒い季節が終って、順調に夏が来るという期待を破って、急に寒さが逆戻りしてくるために、大嵐になったり、大洪水が起ったり、農作物⁽²⁾や家畜にも大きな被害が出る恐ろしい気

象現象である。故に blackberry winter には、期待の中でも不安の要素が最も濃く存在する。

寒の戻りによる思いがけない嵐によって畑が流され、大切な家畜も失えば、人々は抵当に入れるもののことを考えなければならないし、抵当にするものさえもない人々は、クリスマスまでには飢えてしまう恐れが出てくる。洪水の様子を見にきた人たちの会話も自然に昔の食糧難の時代の経験談になってしまう。⁴³ Creek に溢れるように流れてゆく嵐のあとの激流がどんなにすごいだろうと期待して見物にやってくるが、ここで少年 Seth は、その洪水のすさまじさを眺めるよりも、見物に集まった人々の厳しい現実の話に自然に気をとられてしまう。彼がもし7才であったら、彼らの話を理解する能力はまだなかったであろうし、従って耳を傾けることもなかったであろうが、9才になっていたこの時には、彼は何の抵抗もなく大人たちの会話を理解し、自分なりにその内容の切実さを受けとめている。

（また、朝食の時、この地方のタバコ畑が大被害を受けたという父の話もしっかりと理解している。）これらの経験も彼が少しずつ大人へ脱皮してゆく過程のひとつであった。

このように blackberry winter は少年に思いがけぬ体験をさせる。大人（母）の忠告を無視して barefoot を実行したものの、終いには寒さに震えることになった結果も、tramp の出現を殊更に mysterious なものにした原因も blackberry winter 故であった。

Old Jebb が少年 Seth に「Blackberry winter はほんのいつとき戻ってくる寒さで、またすぐいってしまう。そうしてそのあとは一発で夏になる。」という場面⁴⁴があるが、これはまた tramp の image にも重なる。彼は何の前ぶれもなく突然やってきて、少々の trouble を起し、またすぐ去ってゆく。彼が残していったものは何もないし、また別な時に別の tramp がやってくるであろう。彼が行ってしまえばもうこの人々は彼とはいっさい関係がなくなる。そのあとは皆、彼のことなどすっかり忘

れてしまう。ちょうど blackberry winter のあとに夏が来て、暗い冬の季節のことはすっかり忘れてしまうように。

あの blackberry winter の日から、少年の身にも様々なことが起った。数年後、父が草刈り機で負傷し、破傷風になって死亡したために、一家は農場を売り払って町へ移り、数年して母も、まだ人生の半ばで父のあとを追うように亡くなってしまった。居心地の良い職場を失った Dellie 一家も散り散りとなった。少年と仲の良かった Little Jebb は不良となり、喧嘩の末、殺人を犯して刑務所に入れられてしまうし、Dellie も死に、ひとり残された Old Jebb は生活保護を受けて暮すようになる。彼は百才を越えてもなお、“too strong to die” である。若い時には強くなりたいと神に祈ったものだが、この強さだけを私に残したまま、神はもう私のことを忘れてしまったようだ、と嘆く。この言葉には、時の長さが人に残した残酷なほどの試練が表現されている。少年を取り巻く登場人物のすべてが “did follow him, all the years” と言えるかもしれない。この場合の him とは、誰もが抗うことのできないもの、そして甘受しなければならないもの、すなわち、それぞれの人々の運命であろう。

“That was what he said, for me not to follow him. But I did follow him, all the years.” (p. 638)

これはこの物語の最後の文であるが、この一文の中に、主人公(narrator)の幸せに満ちた幼い日々への郷愁の思いの丈がこめられているように響いてくる。優しく、賢く、立派な両親に守られて過した短い少年期の、彼の生活を取り巻いていた大自然の中で、森が、川が、野原が、少年に何を語りかけていたか、そして少年はどのようにそれらに反応していたか。すべて、それらのことは少年が当時そう理解していたのではなく、後に思い出として語られる時はじめて表現されることであり、少年は何も知らず、た

だひたすらにその刹那刹那に関心を示しつつ、彼なりに精いっぱい、時に時を過していたにすぎない。しかし、その思い出のひとつひとつは決して忘れられることなく、常に彼の心の中に生き続けてきたのであって、それ故に彼は、“But I did follow him, all the years.”と信じるのである。この“him”は tramp だけではなく（むしろ tramp は彼の心情の symbolism であって）、少年時代の懐かしい思い出のすべてを暗示しているのではないか。

この blackberry winter の朝のことは、彼にとっては忘れがたい少年の日なのであろうけれど、彼の期待が次々と破られるような出来事ばかりが起った一日でもあった。しかし、少年 Seth はそのように期待を破られるような経験を積み、人の世の条理をひとつずつ会得しながら、逞しく成長していったのである。その成長過程を支えた人たちがこの短い物語（時間的には6月のある朝のほんの数時間のこと）に何人も登場してくる。これは単に作者（または narrator）が自分の少年の頃のことを懐しく思って綴った作品ではない。この物語から響き出してくるものは成長期の少年の精神的逞ましさである。¹⁵⁾ それ故にこの物語は美しいのではないか。美しさにはある強さが含まれていなければ、それは美しく輝くことはできないのである。

注(1) Brooks, Cleanth, and Warren, Robert Penn, *Understanding Fiction*,* Appleton-Century-Crofts, New York, 1959, p. 643.

“I would give a false impression, too, if I were to imply that this story is autobiographical. It is not. I never knew these particular people, only that world and people like them.”

* 本著の Section VI Fiction and Human Experience: How Four Stories Came to Be Written に *Blackberry Winter* 本文と *Blackberry Winter: A Recollection* があり、この *Recollection* 中で、R. P. Warren はこの物語を書くにいたった動機、経緯、主張内容などを詳細に叙述している。

- (2) ここで論じるときには、この物語を R. P. Warren の叙述のとおり *fiction* として扱うこととする。従って、これを作者の自伝としてではなく、部分的自伝でもなく、登場人物の分析もすべてこれをひとつの物語として解釈することにする。

- (3) Ibid., p. 639.

“Whatever the rights and wrongs of the matter, the war, Melville* said, would show ‘the slimed foundation’ of the world.”

* 当時 Warren は Herman Melville の詩集 *The Conflict of Convictions* を読んでいた。

- (4) Bohner, Charles H., *Robert Penn Warren*, Twayne Publishers, New York, 1969, p. 100.

Frederick A. Pottle has described this essay as the ‘most elaborate and learned critique’ Coleridge’s poem has ever received, and Richard Harter Fogle has called it a ‘classic of contemporary appreciation.’

- (5) 当時 Warren は University of Minnesota の教授 (English literature) であった。

- (6) Bohner, op. cit., p. 102.

“It is Warren’s masterpiece and one of the great stories of American literature.”

- (7) Casper, Leonard, *Robert Penn Warren, The Dark and Bloody Ground*, University of Washington Press, 1960, p. 93.

“Blackberry Winter” held in such esteem by its author, justifiably has already entered the histories of its genre.”

- (8) West, Paul, *Robert Penn Warren*, University of Minnesota Press, Minneapolis, 1965, p. 34.

“Blackberry Winter is outstanding in the history of the genre as well as the most compact epitome of Warren’s output.”

- (9) Ibid., p. 34.

“blackberry winter is when the genial spring unnaturally regresses and turns its back, reneging.”

- (10) Brooks and Warren, op. cit., p. 640.

“Something had to happen, and the simplest thing ever to have happen is to say: Enter, mysterious stranger. And so he did.”

- (11) Ibid., p. 640.

“... a declaration of independence from the tyranny of winter and school and, even, your own family.”

(12) 特にこの地方 (Tennessee) ではタバコ栽培。主人公の家もタバコが最大最重要の栽培作物であった。

(13) 濁流に流されてくる溺死した牛を見て、ボロボロのズボンをはいて垢だらけの少年が、誰か溺れた牛を食べたことがあるかとさく。溺れた牛を見て気味悪いという思いよりも、その肉を食べられないかを考えるところに生活の厳しさがある。

すると一人の老人が、人間は飢えれば何でも食べるさと言う。今年もそんな年になりそうだともう一人が言う。

南北戦争に従軍したという老人もいて、当時食糧が何もなくなった時は軍馬の肉も食べたという話をする。

(14) Brooks and Warren, op. cit., p. 635.

“Blackberry winter just a leetle cold spell. Hit come and then hit go away, and hit is growed summer of a sudden lak a gunshot.”

(15) その少年の精神的たくましさの成長を象徴するものが barefoot 主張であり、さらにその成長過程にひとつの動機を与えたものが tramp の出現であり、この二つを小説作法としてさらに印象深いものにすべく援護する役目をしているものが blackberry winter である。この三つの要素は、それぞれ一見無関係にみえる全く異質のものであるが、実は共通した内容素を含蓄している。それは、前述したとおり、期待とそれに連なる不安、好奇心であり、これらがこの三要素の中で微妙に活動し、この三要素を互いに連動させる原動力にもなっている。

参考文献

Bohner, Charles H., *Robert Penn Warren*, Twayne Publishers, New York, 1969.

Brooks, Cleanth, and Warren, Robert Penn, *Understanding Fiction*, Appleton-Century-Crofts, New York, 1959.

この中に掲載されている *Blackberry Winter* (pp. 621~638) をテキストとした。本文中、引用文末尾の () 内の頁数は本書の頁を表わす。

Casper, Leonard, *Robert Penn Warren, The Dark and Bloody Ground*, University of Washington Press, Seattle, 1960.

West, Paul, *Robert Penn Warren*, University of Minnesota Press, Minneapolis, 1965.